【333】

氏　名（本籍）	松本浩一（千葉県）
学位の種類	博　士（文　学）
学位記番号	博　乙　第　1976　号
学位授与年月日	平成15年12月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	宋代の道教と民間信仰

主　査	筑波大学教授	文学博士	片岡一忠
副　査	筑波大学教授	博士（文学）	古家信平
副　査	筑波大学助教授	博士（文学）	楠木賢道
副　査	筑波大学教授	文学博士	堀池信夫

論文の内容の要旨

本論文は，宋代の祠廟信仰，葬送儀礼および道教呪術といった場面における，道士や巫者に代表される民間宗教者の活動，彼らの活動の背景となっている民間信仰，道教教団の動き，それらをめぐる宋朝の統制，知識人の対応について分析し，宋代に旧中国の宗教体制が成立していく事情を考察し，中国宗教史における宋代の特徴を明らかにした研究である。序章，結章と4章13節，史料・参考文献一覧から構成されている。

「序章」では，まず，中国における儒教，仏教，道教の三つの成立宗教が，民間信仰と分かちがたく結びついた存在であること，そのような場面を歴史的に考察するためには，断片的な史料，しかも知識人の目を通して記述された文献史料によっていたのでは不十分であり，現状を踏まえた上で行う必要があるとして，本研究の分析方法が文献史料と現地調査とを併せて相互補完して行われるものであり，そこに本研究の特徴があると主張する。ついで本研究は中国宗教史上における宋代の位置づけを試みるものであるとする。

第1章「宋代の祠廟信仰」では，祠廟信仰をめぐる問題を5節に分けて，文献史料を基礎に，現在の祠廟信仰の実態調査結果を踏まえて考察する。第1節「祠廟信仰の実態調査」では，戦前の日本人学者による華北・華中地域の農村調査や，現在の著者自身を含めて中国内外の研究者によって台湾や香港で行われた祠廟信仰調査より，宋代の祠廟信仰を考察する際に考慮すべき問題点を検討する。祠廟をめぐる庶民，地域，そして祭祀組織に係わる分析概念を規定する。そのことをふまえて，第2節「宋代の社と祠廟」では，宋代の祠廟の存立状況をそれ以前の祠廟の変遷過程を分析することによって明らかにし，第3節「祠廟の祭神とその特色」では，宋代以降の祠廟に祭られた神々の由来とその背景を後代の地方志や筆記小説などの文献史料に拠って考察する。ついで第4節「祠廟の祭礼」では，祠廟内部の問題として，祭典の実態とその祭祀組織としての社について考察し，祠廟が村落，都市の民衆の結合の中心的役割を担っていたことを明らかにし，さらに第5節「祠廟の位置づけと知識人の貢献」では，祠廟における祈願の一形態として道教の斎醮が行われていたこと，その文書である青詞が知識人によって記されていること，そのことから知識人の祠廟へ積極的な関わりを指摘する。

第2章「宋代の葬送儀礼と黄籙斎」は，主に南宋代における葬送儀礼について3節に分けて論じる。まず，第1節「南宋時代の黄籙斎」では，道教の死者儀礼である黄籙斎を分析する。すなわち，死者を地獄から救

済し，仙人の体に鍛え上げて仙界へ送り込むという，一連の儀礼の内容を紹介し，そこで必要とされる文書から死者の救済に係わる神々が官僚制のように整備され，神々への上奏文書形式も官僚世界のように整えられていることを指摘する。第2節「南宋時代における黄籙斎の挙行例」では，黄籙斎をはじめとする斎醮の儀礼が死者の苦しみに起因する病気や災害から逃れるための呪術の主要な形式の一つであり，仏教であれ道教であれ，平安を祈る法事として不可欠なものとなっていたことを，筆記小説から明らかにする。また知識人の手になる祈願文を分析して，知識人の間にもその儀礼を国家祭祀と矛盾するのではなく，地域の平安を祈るための手段の一つとして受け入れられていたことを指摘する。しかし，第3節「宋代の葬送儀礼」では，『朱子家礼』にみられる儒教の葬礼の特徴を分析し，宋代における葬礼議論の背景に庶民層に深く浸透している仏教式，道教式の死者儀礼に対する，儒者官僚の危機意識があったこと，儒教と仏教・道教の葬礼において，各々重点の置き方が異なっていたが故に，以後両者が併存する形が定着したことを指摘する。

第3章「宋朝の宗教政策」では，祠廟や礼をめぐる宋朝の政策を2節に分けて取り上げる。第1節「宋代の賜額・賜号について：主として『宋会要輯稿』にみえる史料から」では，副題にある，宋朝の諸制度の沿革を部門別に総述した宋代史研究の基本史料である『宋会要輯稿』から宋朝が祠廟に対して廟額や廟号を与えた事例を摘出し，そこから宋朝が，祠廟を淫祠として弾圧すると同時進行で，祠廟をも含めた国家祭祀体系の確立を目指していたことを指摘する。第2節「徽宗の宗教政策について」は，北宋最後の皇帝である徽宗の宗教政策をそれ以前の真宗，神宗のそれと比較検討し，徽宗には皇帝が天上の神仙の生まれ変わりであること，儒教と道教はもともと一つの道であった等の北宋一代を通じてみられる傾向とともに，自らを古の聖王になぞらえる意識が働いたこと，そして宋朝皇帝が礼体系の確立に熱意を示したのは内外政治が閉塞状況に堕ち至った中で，精神世界における中央集権の確立を目指したものであり，結果的には徽宗の政策に見られる特異性は，北宋朝に見られる傾向を究極的にまで推し進めたという性格をもつものである。

第4章「道教の新しい呪術の伝統」では，それまでの古代の伝統の中には見られない新しい呪術として登場した雷法，天心法について3節に分けて考察する。第1節「宋代の雷法」では，雷法が民間の宗教者によってひろまっていく様子を南宋に成った怪奇小説集『夷堅志』によって生き生きと描写する。その活動は徽宗時代にも注目されこそすれ，弾圧されることはなく，道教教団，とくに正一教によって呪術として正式に採用され，それが以後の正一教の南方道教における覇権確立に大いに貢献したことを指摘する。第2節「張天師と南宋の道教」では，正一教の領袖である張天師が，南方道教界の中心として位置を占めるにいたった背景を，強力な呪術師として新しい伝統である雷法を採用したことに求め，雷法は一方で道教の国家祭祀的秩序を守護し，それにそむく鬼神や淫祠の神々を駆逐し征伐するという性格が付与され，正統の地位を与えたとする。第3節「天心法の起源と性格：特に雷法との比較を通じて」では，雷法と同様，宋代に登場する呪術の天心法について，雷法が祈雨や祠廟の取り締まりといった国家的な関心を色濃く反映した場面で登場するのに比較して，天心法は治病の呪術として登場し，民間信仰を反映した傾向をもつこと，雷法には理論的裏付けをもっていたのに対して，天心法は現世における罪人の取り調べを模した呪術の過程を重視したことなどに差異が見られるが，この呪術も国家による鬼神の統制という動きと密接に関わっているとする。

「結章」では，各章の考察結果を総括して，宋代，道教や民間信仰に知識人の関心が高まり，儒・仏・道を含む宗教界全体において統合化と階層化傾向が見られ，新しい伝統を構築したとする。

審査の結果の要旨

本論文は，過去の文献史料を広く渉猟し，現在の実態調査を行うことによって，両者に内在する欠点を補完し両者の成果を総合的に関連づけて分析した研究である。従来，史料研究と現地調査が個別的に提示され，相互に検討されることがなかった，すなわち同一の研究者が両者を並行して実行することがなかったことか

ら起こる文献と実態の乖離を，著者は両者を融合することによって解消した点でまず高い評価を与えられる。さらに，民間信仰に対する支配者層の対処を宋代という時代相を踏まえて考察し，宋代宗教史の一面を明らかにしえた点は評価されるべきである。そのなかでも宋朝の宗教政策は庶民の信仰の対象となった祠廟を淫祠として弾圧するだけではなく，廟額，廟号を与えることによって国家祭祀体系に組み込む意図をもっていたとする。さらに宋代はそれまでの伝統の集大成の時代であるとともに，新しい伝統が生み出された時代であるとして，その代表格として呪術を取り上げた。呪術が新しい道教教団の正一教に採用されて，正一教の南方道教の覇権確立に貢献したことを明らかにし，後代につながる宋代道教のもつ新しい側面を指摘したことは道教史を総体として把握する可能性を提示したものとして重要である。以上の点から，本論文が学界に貢献するところ大であると認められる。

なお，各章・節におけるそれぞれの問題に関する官撰史書から筆記小説に至る文献を駆使しての分析，考察の結果をつぎの章節に直結することなく，新たな課題に考察が移ることから，研究成果が個別的に提示されている点は，個々の成果が高く評価できることから惜しまれ，一工夫することが求められる。また，宋代の諸事象を現状から分析することの見事さから，却って宋代と現在の間の変化に目を向けること，個々の問題の外的要因と内的要因を総合的に分析することの必要性を感じさせる。しかしそれは研究成果を認めた上での，研究の一層の発展を願っての要望であり注文である。

よって，著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。